

茜色の歌姫



第五部 法隆寺炎上



法隆寺（奈良県斑鳩町）

是の冬に、（中略）斑鳩寺に災けり。（中略）一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。

（『日本書紀』卷第二十八）

天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。ここに、蘇我臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。（中略）天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃辞讓びて曰はく、「（中略）願

はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日出家して法服をきたまふ。(中略) 或の曰(い)はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。

〔『日本書紀』卷第二十八〕

第四章 恋の行方 670〜671

春の夜。

額田郎女は、寝屋に卓を据え、柿本人麻呂から届けられた木簡を、火影に照らして読んでいた。木簡には、葛城の地の古老が人麻呂に教えた歌が、記されていた。このごろ、人麻呂は、諸国に伝えられた歌を蒐めるとして旅を重ね、額田郎女の邸にも貌を見せない。ただ、時折届けられる人麻呂の木簡が、郎女にとって何よりの慰めであった。

秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時辺乃方二 我恋将息

……秋の田の、穂の上に霧ろう、朝霞、いづへの方に、わが恋やまむ、と読むのだろうか。かつて、葛城の地を統べていた王の妻が、夫を慕って詠じたという。秋になれば、山に囲まれた田畑は朝霧に包まれる。その霧も、日が昇れば消える。霧が消えるように、恋する心が消えることはあるのだろうか。

恋……。額田郎女は、卓に頬杖をつき、虚空に眼差しを彷徨させた。

数日前、倭媛皇后に乞われ、内裏に赴いた。奥深く寝屋に臥した天皇を見舞い、蒐めた歌を披露した。

皇后に並んで坐した天皇の姿に、郎女は愕然となった。肌は黒ずみ、頬はこけ、眼は虚ろに、唇は乾いてひび割れ、袖から覗く腕は枯れ枝のようであった。微笑みかけても頷くばかり、辞するまで、ついに言葉は発しなかった。

かつて肌を重ねた相手が、かくも病み窶れ、正気をすら失った様に、かつて、土蜘蛛として重ねた所業が、郎女の脳裡に蘇った。ふぐりを砕かれた男は、あまりの痛みに命を落とす者もあり、生気を失い廃れていく者もあることは、承知していた。

天皇——かつての豊璋王子との情交は、蝦夷の地で、娘である十市皇女を何者かに姦され、思い悩んだ挙げ句、寝屋でのまぐわいに耽つただけのことであった。間もなく、恋から醒めた。痛ましくはあつても、悲しみも、科人への憤りも湧かなかつた。気に懸かるのは、さほど長くはないであろう天皇の命の尽きた後のことであつた。

斑鳩寺焼失よりこの方、騒がしかつた世情も、ようやく鎮まつた。この二月、新たに戸籍を作るとの詔が発せられた。盜賊と浮浪を断つたためと言われたが、やがて興るべき軍——近江と飛鳥との——に備え、兵を徴しやすくするため、とも囁かれていた。飛鳥と難波の境、高安の山中に巨きな城が築かれつつあるのも、軍の近いことを窺わせた。

すべては、大友皇子とその側近、中臣金や蘇我果安らの献策による。飛鳥の大海人皇子への敵意は、もはや露わであつた。

もし、軍が開かれれば……。

その時、かの皇子は、吾に助けを求めるであろうか。

求められたい。そう口に出して呟いた。心が塞がれ、息遣いが乱れた。

その時。

かすかな気配がした。郎女は身じろぎせず、しかし素早く眼を走らせた。短剣は、右の膝の傍らに置いてある。扉は堅く閉まつているが、窓は開け放たれている。気配は、おそらく天井の梁。一人か……。

「潜んで如何する」

郎女は、動かぬまま声を発した。

「気づかれぬとは、よもや思うてもいまい」

「然り」

梁上の気配が応えた。

「垂那……久しく」

「よもや、鏡郎女が容易く死ぬはずもないとは思っていたが……」

額田郎女は、木簡を手元の小匣に収め、蓋をしながら静かに問うた。

「何故に梁に潜む」

「門を叩いて案内を乞うは、土蜘蛛のやりようではあるまい」

頭上の鏡郎女は笑つて応え、声を引き締めた。

「明日の夜、逢いたい」

「いづくにて」

「安見娘が邸」

「安見娘の？」

「然り」

「何故に安見娘の邸……」

問いが終わらぬ間に、気配は消えた。

明くる夜。

安見娘の邸は、近江京の外れ、比叡の山に近い林に囲まれたなかにある。高い板塀に囲まれ、茅葺きの門は狭い。

額田郎女は林の樹々をすり抜けて進んだ。門前の林は、樹を切り払って馬が通れるほどの小道が作られていたが、あえて避けた。林の中に、人が潜んでいる気配はなかった。やがて、邸の裏手の板塀に辿り着いた。袂から縄を取り出し、塀に架け、瞬く間に越え、音もなく裡の庭に降り立った。

広い邸内には、幾つかの苦屋や庫が並んでいる。いずれも、灯火は消え、人が動いている気配はない。

寝静まっているのではない……。

草が人の丈ほどに生え繁った庭にしばし膝を突いて身を潜めつつ、額田郎女は凝っと邸内の気配を窺った。

罾を仕掛けて待っていたわけではなさそうであった。不意に邸内に入った者に気づき、出方を見極めようとしているのである。ならば、待つこともない。

「土蜘蛛の方々」

郎女は静かに言った。

「出で来よ。吾は額田郎女」

風が鳴り、庭の草木を揺らし、邸を囲む林をざわめかせた。郎女の面前に、一人の女が立っていた。

「繭環」

額田郎女は懐かしげに微笑んだ。

細面に頬骨が高く、萱を削いだような鋭い眼。齢は郎女より五つ下。郎女が土蜘蛛として三輪の箸墓に棲まうようになってから二年、木の国より随れられてきた。父を亡くし、母の許に新たに通うてきた男に姦され、母にも疎まれて山中を彷徨っていた十にも満たぬ乙女であった。暗い面持ちを崩さず、小さな肩を強張らせ、怯えるように見上げたその眼を、郎女は覚えていた。

繭環の貌が嬉しげに崩れかけ、すぐに引き締めた。

「歌人が、何の用ぞ」

二十年の昔と同じく、人を寄せ付けない眼差しで、繭環は問うた。郎女は応えた。

「吾は、呼ばれて来た」

「誰に」

「鏡郎女」

草がざわめき、そこかしこから、四人の女が姿を現した。叢から、樹の陰から、苔屋の裏から、板塀の上から、物音ひとつ立てず、手に短剣を持ち、身構えている。その眼差しが、すべて額田郎女に向けられていた。

「旦那……」

繭環が口を開いた。額田郎女は、土蜘蛛を抜けてからの名乗り。繭環が、かつての名で呼んでくれたことに、郎女は安堵した。少しは懐かしく思ってくれている……。

だが、繭環は厳しい面差しを崩さなかった。

「鏡郎女は……生きているのか」

「生きている」

「何故、汝をここに呼んだ」

「知らぬ」

「知らずに、来たのか？」

「知らずに来た」

「鏡郎女が」

拳を握り締め、繭環は叫んだ。

「何の意もなく、汝をここに呼ぶものか！」

額田郎女は眼差しを落として、黙っていた。繭環はさらに叫んだ。

「吾等を欺き、多くの土蜘蛛を、無用の軍で死なしめた、新羅の女怪ぞ、鏡郎女は」

「然り！」

新たに声が響いた。額田郎女と、五人の土蜘蛛の眼が、その声の方に向けられた。

庭の隅に、小さな亭があった。鏡郎女が、亭の柱に背をもたせかけ、立っていた。

「繭環、汝の言うとおりぞ」

鏡郎女は言った。

「吾は、汝等土蜘蛛をして、多くの者を苦しめ死なせ、遂には、自ら育んだ土蜘蛛をも、死地に追いやった新羅の女怪」

五人の土蜘蛛は手にした短剣を胸元に構え、音もなく亭を囲んだ。鏡郎女は微笑を消さぬまま、続けた。

「さらには、斑鳩寺を焼き、天皇のふぐりを砕き、汝等の長たる安見娘を殺めた。憎き仇であらうぞ」

「ならば」

繭環が、唇を震わせた。

「吾等を悉く討ち、後の禍根を絶とうとして来たか」

「汝等は」

鏡郎女は応えた。

「吾が育んだ土蜘蛛。技を極めた土蜘蛛五人に、左右の手を失った吾が、かなうものか」
袖を振り、手のない腕を示され、五人の土蜘蛛は貌を見合わせた。

「さらに」

やや離れて立っていた額田郎女が口を開いた。

「自ら脚を縛るとは、何の意ぞ」

土蜘蛛どもの眼差しは、鏡郎女の脚に注がれた。袴の太股から足首にかけ、びっしりと太縄が巻かれていた。

額田郎女は、しばし、鏡郎女を見つめた。穏やかな面差しに、澄んだ瞳。額田郎女は呟くように言った。

「ここで討たれても、構わぬというのだな」

土蜘蛛どもは息を呑んだ。確かに、鏡郎女は、手もなく、脚も使えず、身に兵器を帯びている様子はない。

「躊躇うことなく、討て」

鏡郎女は微笑み、自ら縛った膝を折って坐し、繭環を見やった。

「汝等の手で討たれば、幸いである」

「汝を討つに、何を躊躇おうぞ」

揺れ動く心を押し殺しつつ、繭環は低く問うた。

「されど、討たれるだけならば、吾等で足りる。何故、巫那をも呼んだ」

「そのこと……」

鏡郎女は言った。

「安見娘が死んだ後、多くの土蜘蛛が逃散したと聞いた。残る汝等五人、この先、如何する」土蜘蛛どもは互いの貌を見やった。繭環は面差しを歪め、他の四人はそれぞれに、不安と迷い

を浮かべていた。

大友皇子は、安見娘の死を悼むことなく、むしろ喜んだ。女が武を以て政事に容喙するは、大和の旧弊とまで広言した。中臣金は、皇子の意を受け、土蜘蛛の日々の費えの給付を止めた。

「逃散したくとも、あてがないのであろう」

鏡郎女の言葉に、繭環は憤って叫んだ。

「そもそも、土蜘蛛の窮状を招いたは、汝ではないか！」

「然り」

まっすぐに眼差しを向けた鏡郎女に、繭環はさらに言い募ろうとして口を噤んだ。鏡郎女は続けた。

「されば、額田郎女に頼みたい」

言いつつ、額田郎女を見やり、鏡郎女は拝むように背を折った。

「この五人の身、額田郎女の差配に委ねたい」

額田郎女も、五人の土蜘蛛も、呆然と鏡郎女を見つめた。鏡郎女はさらに言った。

「額田郎女……巫那ならば、差配を誤ることもあるまい」

「吾は……」

額田郎女は口を開いた。

「もはや歌人、土蜘蛛にあらず」

「土蜘蛛として用いずともよい。汝が邸の女嬪として召してもよい。いずれにせよ、汝に任せる。されど……」

鏡郎女は貌を上げ、乞うように言った。

「この五人、やがて興る軍に、随分と役に立とうぞ」
しばし口を噤み、額田郎女は呟いた。

「やがて興る軍……」

「然り」

貌を強張らせた額田郎女を見つめ、鏡郎女は言った。

「大海人皇子を助けたくば」

五人の土蜘蛛は、固唾を呑んで、二人の郎女のやりとりを凝視していた。

鏡郎女は、さらに身を折って額を地につけ、額田郎女は黙して応えない。

「鮎芽……」

繭環が口を開いた。二十半ば、整った面差しの土蜘蛛が繭環を見返した。

「汝は如何？」

「吾は……」

鮎芽は、しばし躊躇い、やがて応えた。

「額田郎女の差配ならば、喜んで受ける」

「葉耶、汝は如何？」

二十くらい、ふっくらした頬の土蜘蛛は応えた。

「吾も、随う」

「結奈」

十七、八の、痩せて気の剛（こわ）げな土蜘蛛が、黙したまま領いた。

「瀬莉」

繭環は、十五、六か、稚なさの残る眼の大きな土蜘蛛を見やった。瀬莉はしばし睫をしばた

たかせ、やがて領いた。

「分からぬ……吾は、他の方々に随う」

「吾は……」

遮るように、額田郎女は言った。

「幾度も言う。吾はすでに、ただの歌人。たとえ軍が興ろうと、いづくの方にも味方せず、歌に

専心するのみ」

「大友皇子が高御座に即けば……」

鏡郎女が言った。

「大和歌もまた、大和の旧弊として禁ぜられ、漢詩のみが認められる世となろう。諸処の歌を蒐め、文字に記すなど、赦されまい」

「吾が歌蒐めの費えは、倭媛皇后が給したまう。大友皇子の意など、関わりなきこと」

「天皇が崩御した後、大友皇子とその側近が、皇后の称制を続けさせるものか」

額田郎女は黙した。鏡郎女は続けた。

「まず、皇后を廃し、さらには己が妃たる十市皇女をも廃し、さらに大海人皇子を滅ぼし、かつての大和の大王家の血筋を絶やそうとするであろうよ」

「知らぬ、知らぬ」

額田郎女は激しく首を振った。

「歌は、いづくにても歌える。費えなどなくとも、近江におらずとも、東国にても、蝦夷にても、あるいは二名の島にあつても、歌の力は天地をも動かし、人の心を慰むるもの」

「十市皇女を……」

鏡郎女は悲しげに問うた。

「哀れとは思わぬのか」

「十市皇女は、吾を母と慕うていない。憎み、蔑んでいる」

「されば、大海人皇子が滅び、大友皇子がこの国を統べてもよいと？」

「何故に汝は……」

額田郎女は声を荒げた。

「大海人皇子に味方する。そもそも、大海人皇子も吾も、汝の敵であつたではないか」

「そのように思つたことなど、一度とて、ない」

鏡郎女は眼差しを臥せた。

「大和と百済が新羅を滅ぼせし後、即ち、吾が大望果たせし後は、大和を、汝と大海人皇子にこそ統べさせようと、そう希つていた」

鏡郎女は、穏やかな声音で、己の生い立ちを語つた。新羅の王女として生まれ、花郎として武を以て善徳女王の側近く仕え、やがて他の花郎の妬みを買ひ、一族を悉く討たれ、百済へ、さ

らに大和へと逃れたこと。

「時に笑みさえ浮かべ、虚空を眺めつつ語る鏡郎女に、額田郎女も、五人の土蜘蛛も、身じろぎもせずに聞き入つていた。

「思えば……吾が希ひはただ一つ、吾を辱め、一族を誅戮した新羅を滅ぼし、大和に、三韓に吾が思いを託せる国を、汝等に築かしむること。それ故……」

鏡郎女は、涼やかな眼差しで額田郎女を見た。

「如何に汝等が、吾が三韓出兵の謀を妨げようと、汝等を誅しようと思つたことは、一度とてない。あの折りならば、吾がそう思えば、汝等を誅することなど、容易かつたであろうに」

鏡郎女は口を嚙み、邸の裡はただ、風に鳴る樹々の葉と、叢のざわめきのみを満たした。

「されば……」

口を開いたのは、額田郎女であつた。

「汝が、この土蜘蛛の五人を率ひ、大海人皇子を助ければよいではないか」

「この土蜘蛛どもが、吾に随うものか。多くの罪を重ねた吾に」

鏡郎女は寂しげに言った。

「大海人皇子とて、吾の助けは求めまいよ」

「吾の助けもまた、皇子は望まぬ」

「望んでいるはず」

「ならば、何故……」

額田郎女は唇を噛みしめ、声を絞り出した。

「皇子自ら、そう、吾に告げぬ」
「告げてほしいのか？」

鏡郎女は静かに問い、額田郎女は黙したまま応えなかった。面差しを強張らせ、眼差しを伏せたまま、微かにも動かなかった。

「額田郎女は……」

いちばん年若な、土蜘蛛の瀬莉が、不思議そうな眼差しで、誰に言うともなく問うた。

「大海人皇子を……恋うておるのか？」

「瀬莉」

繭環に短く窘められ、瀬莉は口を噤み、肩をすぼめた。

「かつては……」

額田郎女は、笑みを浮かべて十五の土蜘蛛を見た。そう……伊勢の地にて、大海人皇子と睦み合っていたのは、その齢の頃。

「恋うていた」

「今は？」

眼を輝かせて問う瀬莉に、郎女は応えた。

「分からぬ」

「何故？」

「齢を重ねると……己が心が、己にも分からなくなる」

「何故に？」

細い首を傾げて問いを繰り返す瀬莉に、悲しげな笑みを返し、額田郎女は踵を返した。繭環がその背に向かつて言った。

「旦那……」

「その名で呼ぶな」

額田郎女は歩き始めた。

「吾と、歌を蒐めたくは、ともに来よ」

四人の土蜘蛛が繭環に、すぎるような眼差しを向けた。繭環は俯いて首を振った。

額田郎女は、すでに板塀の間際まで歩み、袂から縄を取り出した。

そのとき、鏡郎女が叫んだ。

「讚良皇女よ！」

縄を塀に架けようとした額田郎女の手が止まった。鏡郎女は続けた。

「そこに潜んでいたことは、すでに知っていた。出で来よ」

振り向いた額田郎女の眼差しの前に、一棟の苦屋の陰より、讚良皇女が姿を現した。短剣を抜いて身構えた土蜘蛛どもを見やり、ゆっくりと草を踏みしめて歩み寄ってきた。

「讚良！」

「久しく」

讚良皇女は、凝然と立ち尽くす額田郎女に眼差しを向けぬまま、俯いて言った。額田郎女は、驚きと嬉しさの混じった面差しで問うた。

「生きてあったか……今まで、いづくで如何していた」
「話せば長くなる」

讚良の声音は強張っていた。
「そのことは後に」

額田郎女から貌を背け、讚良皇女は鏡郎女に歩み寄った。
「汝を追って、ここに辿り着いた。何故、何も言わずに去った」

「汝こそ」

鏡郎女は微笑みを浮かべて問い返した。

「河辺宮かわらのみやに還れかえというたであろう」

「還った」

「では何故、近江に来た」

「大海人皇子に頼まれた」

額田郎女の肩が、かすかに動いた。面差しを凍らせ、こみあげる思いを抑え付ける額田郎女を一瞥いちべつし、鏡郎女が問うた。

「何を頼まれた」

「額田郎女に伝えよ、と」

讚良皇女も、鏡郎女も、五人の土蜘蛛どもも、みな、額田郎女を見た。郎女は踵を返して、七人の眼差しに背を向けた。
鏡郎女がさらに問うた。

「何と伝えよ、と？」

讚良皇女は、額田郎女の背を見やり、俯き、唇を尖らせ、しばし躊躇ためらい、眼差しを臥せたまま言った。

「赦ゆるせ、と」

額田郎女の肩が、またも震えた。

「もうひとつ……」

讚良皇女は、続けた。かすかに声を哽しわがれさせ、言った。

「吾を……助けて……と」

吾を助けて。

額田郎女の脳裡に、伊勢にあった頃が次々と湧き上がった。

初めて大海人皇子とあった海辺の崖。

海部の邸内に建てられた、皇子の宮に忍び、与えられた米の味。

皇子や、村国男依むらくにのおより、村本大国むらもとのおくに、海部石床あまべのいわたこら舎人とねりどもと払暁の海辺を歩き、ともに見上げた曙光。

大和の王宮から膳かしわのおみ臣みが伊勢に現れ、采女うねめとして召されかけ、声を振り絞り叫んだ。
吾を助けて。

そう……。

巫那、あなたは確かに、あの時、叫んだわね。あの下卑た膳臣の股間を蹴り上げ、兵士たちに矛を突きつけられながら、あなたは叫んだ。涙を霽しながら、大海人皇子に向かつて。

あの時、私はあなたを助けたかった。もちろん、一撃で相手を倒した、あなたの鮮やかな身のこなしに、土蜘蛛の一員として、ぜひともほしいと思った。でも、あなたを助けたかったのも事実。大海人皇子に救えないのであれば、私が救ってあげたい、と。

私を助けて。

新羅で、私を妬んだ花郎たちに襲われたとき、私もそう叫びたかった。叫んでも、誰も助けてはくれない。それが分かっていたから、叫ばなかった。

あなたは、叫んで助けてもらえなかった。あなたを助けたのは私。でもあなたは、皇子に助けてもらいたかったのでしょうか？ 彼は、助けてはくれなかった。でも、あなたを十分、慈しんでくれるでしょう。

大丈夫。あなたはもう、誰の助けなしでもやっていける。多くの民を、歌の力で励ましたように、あなたをいちばん慈しんでいる人を、助けてあげなさい。

私は、もう終わった。唐、三韓、大和に、またがるこの世界を、私の理想で染め上げる。そんな野望も、もう消えた。私をかつて慈しみ、そして裏切った豊璋王子、いまの天皇を斑鳩寺で倒したとき、私の復讐は終わったの。

私は、額田郎女に、そして讚良皇女に、土蜘蛛の武を教えた。この二人が、飛鳥と近江にいれば、必ず勝てる。勝って、築くよ。

新しい世界を……。

何故、吾は、伝えた。

近江の兵どもの眼を潜り抜け、草を食み、泥水を啜り、やっと河辺宮へ辿り着いた。疲弊し、子宮の奥の室に倒れ伏せた吾を、夫なる皇子は常に添うてくれた。鏡郎女とともに、斑鳩寺を焼き、天皇のふぐりを砕いたと伝えた時、皇子は吾に問うた。

やがて軍になる。尾、濃、伊勢の兵を集めれば、近江の軍にも対しえよう。されど、心にかかるは、近江にある十市皇女。さらに、汝がかつて睦みし木幡、すなわち倭媛皇后。大友皇子は、軍となれば、十市皇女と木幡を兵に囲ませ、攻め入れば殺すと脅してくるであろう。そうさせぬために、如何すべきか、と。

吾は考えた。数日、考えて、なすべき策はただひとつ。

額田郎女の助けを得ること。額田郎女なれば、軍が興るとともに、十市皇女と倭媛皇后を、無事、大友皇子から守ることもできよう。

そう、大海人皇子に告げるより先に、皇子自ら言うた。

額田郎女の助けなしには、しえない、と。

さらに言うた。吾は、これまで額田郎女の助けを得ることはあっても、助けたことはなかったと。

吾は皇子をなじった。額田郎女は、筑紫にて、鏡郎女と葛城皇子が宝大王を弑殺したのを見、追われたとき、逃がしてくれた人。請えば必ず助けてくれる人。それを知る皇子が、何故郎女に助けを請わぬか。

額田郎女よ。同じく大海人皇子の妃として、汝を妬む。されど、汝が皇子を助けるのを妨げぬ。皇子がまことに頼るは汝。吾は、いずれこの国を統べる身と宝大王に言われた。吾が国を統べるためにも、いま、近江には勝たねばならない。そのために、汝の助けが要る。否、近江に勝ちて後も、この国を統べるため、かつて、宝大王に数々の献策をなし、大和を富ましめた汝の智慧が要る。

尾にある吾が子、草壁皇子に、富み栄える日本を継がせるためにも……。

「まことに……」

額田郎女は、大きく息を吸い、途切れがちに言った。

「大海人皇子が……」

肩が大きく震え、やがてうなだれ、両の手で貌を覆うのを、十五の瀬莉は首を傾げて見つめ、傍らに立つ十七の結奈に問うた。

「額田郎女は、泣いているのか？」

額く結奈に、瀬莉はさらに問うた。

「何故に、泣く」

結奈はしばし黙して思いをめぐらし、やがて言った。

「恋うるゆえ……かな」

その夜以来、近江京のはずれに立つ安見娘の邸から、人の姿が消えた。

中臣金は倉皇として大友皇子の宮に走り報せたが、大友皇子は興味なげに「もとは父なる天皇が、中臣鎌子に賜った地。汝が幸領で如何ようにもせよ」というのみであった。

その天皇は、内裏に籠もったまま姿を現さず、倭媛皇后が太政大臣たる大友皇子とともに、政事を称制しつづけた。

額田郎女は、変わらず邸で歌蒐めに励んだ。ただ一度、倭媛皇后に、蒐められた歌の整理のため、新たに書庫を造り、女孺を数人置くため、内裏の庫より費えの給付を賜わりたいと申し出た。皇后は諾した。

飛鳥、大海人皇子の河辺宮の周りには、彈正台の官人が幾人か、密かに屯し見張っていたが、宮の裡にはとくに動きもなく、咎めるべき何物をも見出せぬままであった。

その年、唐と新羅からの使者が、近江の内裏を訪なった。前年、唐が高句麗を滅ぼした。高句麗の滅びは、三韓の地をめぐり、長らく盟を結んできた唐と新羅との間柄を裂いた。唐は、三韓に軍を留め、版図に呑み込もうととし、新羅は、唐の軍を退かしめんとし、諸処で、小さな競り合いが絶えなかった。

唐と新羅は、ともに日本に助けを請うた。大友皇子や百濟より来立った人々は、唐に味方し新羅を滅ぼすべし、と唱えた。しかし、倭媛皇后は諾しなかった。和やかな笑みを浮かべて使者に對し、さりとして、いずれを味方するとも言質を与えぬ皇后の振る舞いに、多くの人々は感嘆した。

やがて年が明け、何事も起こらぬまま秋となったある日。

——大海人皇子が、内裏を訪なうらしい。

噂は近江京じゅうに伝わり、人々は囁き合った。

——いよいよ、天皇はしたまうらしい。それ故、倭媛皇后は先の子とを皇子に譲るとのことだ。
——否、否。実はこの度のことは、大友皇子等の謀。かつて、蘇我鞍作を板蓋宮で討つたように、内裏の裡にて大海人皇子を誅せんとの意ではないか。

——大海人皇子が討たれば、皇子に組みする中小の豪族どもが黙ってしまい。高市皇子、あるいは大津皇子ら、大海人皇子の御子を奉じ、謀叛に及ぶのではないか。
——いずれにしても、天皇が崩御れば、軍は避けられぬ。

流言飛語がさかんに交わされる中、十月に入り、大海人皇子は河辺宮を出で、わずかな舎人と壮丁のみを伴い、近江京へと向かった。

大路は、人垣で埋め尽くされていた。

京とは、ただ天皇のいます内裏を指すのではない。中務省、式部省、民部省、治部省、兵部省、刑部省、大蔵省、宮内省、弾正台、五衛府といった、新設の官衙、また官衙に仕える官人の住まいが、内裏から南へまっすぐに伸びる大路に沿って建ち並んでいる。

唐や百済に倣って設けられた官制は、いまだ整ったとも言いがた、人の異動も頻りと行われ、法式の備わらぬまま、いたずらに命令が出されては取り消されていた。

大友皇子は、急ぎすぎだ……。ひとびとは囁き合った。唐に倣うことのみ考え、政事の実を知らぬ。

すべてが新しく、新しいが故にほころびの目立つ近江京を訪なう大海人皇子を、ひとめ見ようと、民も官人も、五衛府や弾正台から派された兵どもに制されつつ、群となって大路に集まってきた。

きた。

やがて馬に乗った大海人皇子、付き随う騎馬の舎人ども、荷を担いだ徒歩の壮丁どもが大路に姿を現した。

歓呼の声はなかった。人々は声を潜め、囁き合い、領きあい、やがて興である軍の基とされる皇子を、遠巻きに見つめていた。こわごとと注がれる無数の眼差しの中に、大海人皇子は確かに見出した。

やはり、出迎えてくれたか……。

髪を結い上げ、粗末な冠、破れほつれた上着に、洗い晒して色の落ちた袴から伸びた素足。名もなき小豪族に仕える貧しい伴部の装いながら、その眼に満ちた光は、他の誰でもない。

額田郎女よ……。

皇子はまっすぐに馬上から額田郎女を見下ろした。伴部に身をやつした郎女もまた、まっすぐに皇子を見上げ、拳を握り、己が胸を軽く叩いた。

皇子は領き、同じく拳を胸に当てた。

額田郎女の瞳がかすかに揺れ、貌いっばいに笑みが弾けた。そのまま踵を返し、群の裡へと消えた。